

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720310

研究課題名（和文）米軍占領下の都市再建に関する地理学的研究
場所の政治と空間の生産をめぐって研究課題名（英文）Planning Strategies of Urban Reconstruction under United States
Administration in Post-War Japan

研究代表者

加藤 政洋（KATO MASAHIRO）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30330484

研究成果の概要（和文）：

本研究の主な成果は、先の戦争で大規模な被害を受けた日本の都市が、戦後に連合軍が進駐して、事実上、米軍の占領下に入るという特異な条件のもとで、いかにして都市の再建・復興を成し遂げたのか、そしてその過程に米軍がどのように介在したのかを分析し、当時の都市建設・復興（都市再建）に固有の理念と空間的な論理の一端を明らかにしたことである。本研究では、H・ルフェーブルの「空間の生産」概念にもとづいて、とりわけ戦後沖縄の都市復興（那覇）を事例に、戦後都市形成の歴史地理を考察した。その結果として明らかになったのは、那覇の都市建設における首都的性格という特異性と、米軍統治下という状況に固有の形成過程という二つの側面があることである。すなわち、首都であるがゆえに空間管理の徹底を旨とする都市計画と、人口流入という社会的趨勢に応じた、なかば自然発生的な市街地形成とがところによってはモザイク状に入り組み、現在の景観を成り立たせている過程を浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to clarify the process of urban reconstruction under U.S. military occupation in post-war Japan. In this research, the area chosen for intensive study is Naha (Okinawa Pref.) and focused on the formation process of urban space after the war. It is that as a result, there are two sides of a peculiar formation process to uniqueness of capital character in the city construction of Naha and the situation under the U.S. military rule that it was clarified. That is, because it was a capital, an urban formation according to a social tendency like the city planning of which the purport was the thoroughness in the space management and the population inflow, etc. spontaneous was complicated as mosaic according to the point, and the process of composing a present spectacle was able to be brought into relief.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：空間の生産、都市計画、米軍占領下、場所の文化政治、那覇、コザ

1. 研究開始当初の背景

終戦から 60 年の歳月が過ぎ、「戦後」がようやくにして歴史学の対象となりはじめた

昨今、さまざまな分野で戦後研究が開始されていた。またメディアでは昭和 30 年代がブームとなり、高度成長期へとさしかかる時代の

背景や景観をめぐる話題もさかんであった。

従来、都市地理学や歴史地理学ではあまり取り上げられることのない戦後の都市（昭和20年代～30年代前半）をあえて対象としたのは、M・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領』（1996年）、吉見俊哉『親米と反米』（2007年）、栗田尚弥編『地域と占領』（同然）に代表されるごとく、隣接諸分野では占領軍たる米軍（ないし米国）との関わりを通じて、戦後の日本社会の変容を描き出す取り組みがなされてきたものの、残念ながらそれらは「社会」にのみ照準するあまり、都市それ自体、つまり都市の「空間」の変容は一顧だにされないとは言わないまでも、少なくとも占領下ないし統治下という条件のなかで米軍が都市の再建や改造にどのように関与し、その結果としてどのような空間が生産されたのかという点については、まったく明らかにされてこなかったからに他ならない。

研究代表者は、これまで科学研究費補助金基盤研究の分担者・研究代表者として昭和戦後期の都市空間変容を調査・研究するなかで、復興期の都市再建に米軍の果たした役割が、これまで考えられていた以上に重要であることを認識するにいたった。

戦後の都市は自律／自立的に復興を遂げたのではない。米軍は既存の都市構造に部分的に立脚しながらも、時には大規模な接収を含む強権を発動し、頻発する多様な問題を対処療法的に除去・解決しながら、都市の建設ないし再建を後押ししたのである。占領下におけるこうした日本都市の状況は、たとえば現在のポストコロニアリズム研究において論証された統治性の問題構制を共有していたとも言えるだろう（野村浩也編『植民者へ』2007年；D・Gregory, *the Colonial Present* 2004）。

2．研究の目的

上記のような、これまでの科研費研究の成果とそこから導き出された問題意識を踏まえ、本研究は、米軍占領下において現在の都市構造を規定するような「空間」がいかにして生産されたのか、という一連の過程とその帰結を明らかにすることを目的とした。

具体的には、軍隊向けに構築されたレクリエーション施設 歓楽街、特飲街、特殊慰安施設 や「焼け跡闇市」など、いずれも、それぞれ固有の機能を備えた「場所」を対象とした。

戦後、こうした場所がどのように構築されたのかをまずは丁寧にたどり直すことで、米軍の統治理念がどのように反映されていたのかを明らかにする（「場所の政治」へのアプローチ）。これらは政治経済的／社会文化的な背景を踏まえつつ、都市計画的な側面か

らも把握する必要がある。

このような「場所の政治」を課題として設定することで、諸種の場所の空間的布置を含めた戦後都市の「空間の生産」の様態を地理学的に解明する。

3．研究の方法

研究期間（2年間）のなかで本研究の目的を達成するために、1）まず英語圏を中心とした文化・社会・歴史地理学における「空間の生産」論、そして「場所の政治（学）」に関する文献を精読し、経験的な研究への展開を可能にすると思われる論点や分析手法を導出し、整理した。

そして、東京と那覇を中心に、調査・資料収集を行なった。具体的には戦災地図（ないし戦後すぐの地図）、復興計画地図、復興計画・都市計画に関する書類など、比較検討が可能な公的な文書資料を中心に収集した。また、米軍空中写真をはじめとする空中（航空）写真を活用することで、地形図や都市計画図には必ずしも表現されることのない情報を収集した。

くわえて、公的な一次資料からは得ることのできない情報を、二次的な資料ならびに公報・新聞記事、その他の関連する資料の収集を通じて補った。とりわけここでは、米軍と折衝した旧内務官僚系の人物や警察関係者（沖縄の場合は民政府、後の琉球政府関係者）が著した社会生活誌的な側面や内情に関するルポルタージュを中心に収集した。

以上の資料・現地調査から、復興期の都市景観を復原すると同時に、形成過程を明らかにした次第である。

4．研究成果

(1) 那覇の首都計画

戦後の沖縄では、バーやスナック、居酒屋や料理屋、旅館といったサービス業の集積する繁華な地区 「歓楽街」 が、米軍基地の周辺を含めて各地に形成された。それらは「社交街」とも呼ばれ、那覇市の中心商店街である国際通りに隣接した「桜坂」などは、その代表的な例である。歴史的に見ると、社交街のなかには買売春の行なわれるところが含まれたほか、近年にいたるまで「売春の実態が度々明らかになる」ような歓楽街も、少なからず存在していた。

この研究では、ところによってはそのように買売春の温床ともなった地区の形成過程を、戦後の都市建設期にまでさかのぼり、当事議論された「歓楽街」の設置問題を糸口にして明らかにした。一見すると「自然に形成された」ように思われる場所でも、実はさまざまな意図が絡み合い、政治的な力関係に左

右されながら創出されていたことがわかる（場合もある）。前期の科学研究費補助金にもとづく研究に引き続いて取り上げた那覇の歓楽街のひとつ《栄町》も、為政者が都市空間の全体を俯瞰しつつ、施設・機能・用途地域を適正に配置しようとする都市計画的な志向性のなかで、創り出された場所であった。



実のところ、《栄町》をめぐるのは、別の側面があることも明らかとなった。すなわち、栄町の成立は、1953年に琉球立法院が都市計画法を可決する以前のことであり、実質上の都市計画にまつわる業務を民政府の一部機関と連携した自治体の首長ないし技師が行っていた。真和志村では、後の栄町の開発にあたって、当初から「料亭街」の用途指定をしていたのである。これは、上の図にも示されるごとく、首都近傍の立地を生かした都市計画的な志向性の強い空間配置とみてよいだろう。

(2) 那覇市における辻の復興

風俗営業取り締まりの常套手段、それは空間的な囲い込みである。現在は、特定の範囲における営業を制限する空間的排除の方が主流になっているように見受けられるのだが、少なくとも近代以降の花街（遊廓）に対する取り締まりは、地区の指定をもって営業を許可するという、事実上の「囲い込み」を中心に行なわれてきた。

太平洋戦争末期の空襲によって罹災した各都市の遊廓は、戦後、その多くが元の場所で、あるいは移転した先で、遊廓から特殊飲食店街や赤線などと名を変えて、旧来の営業をほぼそのままつづけていた。なかには終戦を待たずして再開したところもある（拙著『敗戦と赤線』）。

知られるように、旧遊廓-赤線は、1958年から罰則規定を含めて施行された売春防止法によって廃止されるのだが、当初は旅館などに転業した業者たちのなかから、トルコ風呂（後のソープランド）に切り替えるものが

あられ、結果として東京の吉原、名古屋の名楽園（旧中村遊廓）、岐阜の金津園、神戸の福原のように、現在も個室付浴場街となっているところも少なくはない。

このように見てくれば、近代都市の遊廓と現代都市の個室付浴場街とのあいだに、ある程度の連続性が認められよう。那覇の戦前の遊廓もまた、現在は個室付浴場街となっており、一見すると連続しているように思われるのだが、実のところは断絶していることが明らかとなった。

戦後米軍統治下の那覇において《辻》が復興する素地は、この断絶によって消滅したといってもよく、後に歓楽街となる必然性などもなかったのである。



図1 那覇市とその周辺の概観

ところが、首都計画の不認可を背景として立案された那覇市都市計画における用途地域の変更、すなわち「特殊商業地区」の制定によって、復活の可能性が生まれたのである。特定の土地利用の布置、すなわち用途地域制を根幹に据える都市計画と、空間的な囲い込み／排除を手段とする風俗営業取り締まりとは、そもそも親和性が高い。フランス人思想家アンリ・ルフェーブルの言葉を借りるならば、都市計画とは「社会のあらゆる問題を空間の問題として定式化」するイデオロギーでもあるからである（ルフェーブル『都市への権利』）。

ルフェーブルが都市計画的な空間の表象を「幾何学者たちの空間」と呼ぶごとく、都市計画は（理念的には）無色透明な空間を切り分けて、最適な配置を具体化すべく、用途や機能にもとづく色の塗り分けをする。まさに、そうした土地利用のなかに、権力と空間の関わりを見て取ることができるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

加藤政洋「アンリ・ルフェーブルの中核性概念に関するノート」『空間・社会・地理思想』第14号、31-39頁、2011年。

〔学会発表〕(計1件)

加藤政洋「戦後那覇の都市計画と「場所の政治」 辻町 の再興をめくって」
2009年日本地理学会秋季学術大会(於：琉球大学)

〔図書〕(計3件)

加藤政洋『神戸の花街・盛り場考 モダン都市のにぎわい』神戸新聞総合出版センター、2009年。

加藤政洋『敗戦と赤線 国策売春の時代』光文社新書、2009年。

加藤政洋『京の花街ものがたり』角川選書、2009年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 政洋 (KATO MASAHIRO)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30330484